

回顧録

富山県 吉田 文武

はしがき

昭和時代は今年をもつて通算六十一年となった。悠久なる歴史の流れから見れば電光瞬時といえるのであるが、しかし明治百年史から見ればその半ばを越し、これを個人の立場から考えると生涯における青壮時のすべてを意味しよう。

この時代に生きた自分としては忘れることができないことはもちろん、血肉の中に染みこんだ昭和六年に起きた満州事変、昭和十二年七月の北支蘆溝橋事変となり、以後相次ぐ悲劇的な日華交戦へと激化した上で、ついに昭和十六年十二月八日真珠湾に炸裂した運命的な日米戦争の導火線となり、昭和二十年八月十五日の降伏の日まで爆発し続けたのである。

帝国陸軍は将来食糧の宝庫として満州に進出し、然

して満州帝国を側面より援助し、両国の国民が五族協和の名のもとに互いに手を取り合つて進んで行くことを念願としたのであるが、時の帝国政府は一部軍部の支那進出派のために押し切られて行くのである。片手にバラの花を持ち、片手に銃を持ち、北支蘆溝橋爆発となり支那事変となつて行くのである。

自分も学校を卒業して富山県電気局土木課に奉職したのであるが、同僚たちが次から次へと一錢五厘で呼び出されて軍隊に入隊して行く姿を見たとき、やがては自分にもかならずや来るものと覚悟をして課長に相談す。課長いわく、「関東指令部にて技術者を要望している」とのことであり、富山連隊区指令部に出頭し係官と話し、軽い筆記試験を受ける。

時、正に昭和十三年十二月の年の瀬も暮れんとする二十日ころであったと記憶する。越えて昭和十四年一月初め関東軍指令部より一通の採用電報が届く。両親はじめ親類縁者それに妻もびつくりする。しかし、関東軍に採用されたことでもあり、行かなければならないと、昭和十四年二月七日富山駅午後八時三十分発の

列車に乗車する。駅頭には富山県庁より三十人くらい、それに親類縁者及び近所の方々など三十人くらい、誠に盛大なる見送りであつたことを思い出す。

自分は今ここに、この世に生を両親より受け継いで、人生に一度しかない青春時代を我が祖国日本に捧げて足掛け八年丸七年間、国家のために全滿各地及び千島列島までも足跡を残し、国家に捧げ尽くした自分が何をもつて報いてくれるのでしょうか。自分は今静かに過ぎ去りし過去の一つ一つの出来事をたどりつつ、ここに自分の回顧録を記するものである。

一、 関東軍經理部工務課統括班

関東軍經理部工務課統括班在任期間

昭和十四年二月〜昭和十四年三月

秋に昭和十四年二月十日、滿州国新京に午後九時に到着す。地理も何もわからない自分であつたが、駅前にあつた憲兵派出所に飛び込んで「自分は関東軍司令部よりの採用電報を受け取つたので単身出頭、ただ今新京に到着しました」と言つて電報を見せたところ、遠路ご苦労様でしたと言つて夜も遅いので憲兵上等兵

は日本人経営の旅館に案内してくれる。そこで一泊し、翌十一日関東軍司令部に行つたところ今日は紀元節で休日であるので明日来て欲しいとのことであつた。旅館に戻り一泊、翌十二日関東軍司令部經理部に出頭す。

經理室に案内され、池田良恭課長に面接し、採用電報を渡し「内地の富山県庁から来ました吉田文武であります」と名乗る。課長は「吉田君か」と言つて山積みの履歴書の下の方から自分の履歴書を取り出してしばらく見ていて「君は県庁で任官していたんだね」と言われたので、「はいそうです」と答える。それから部長に紹介するからと言つて部長室の前に行つたところ、入口の両側に着剣をした番兵が二名いたのでびっくりし、中に入つてまたびっくりしました。と言うのは陸軍主計少将古野吉武閣下である。我々には到底考えられないことが今自分の目の前に起きたからである。遠い雲の上の人でもあつたからである。

閣下は自分の履歴書を見て「君は富山県庁の役人であつたか」と厳かな口調で「ここは関東軍司令部であり軍隊である。一死奉公の精神をもつて業務に精励せ

よ」との言葉であつたので「頑張ります」と答える。

それから部屋を出て再び経理室に帰り、課長から「富山連隊区司令部の手落ちである。役所で任官していたら当然陸軍技手でなければならぬのに雇員として書類を提出しているから本当に気の毒だが一、二カ月待つてくれ。四月に年度が変わるから、急いで任官の手続を取るから」と言つたので「よろしくお願いいたします」と言う。それから課長は「これから工務課へ案内するから」と言つて工務課に行く。

また自分はびっくりする。なぜならば、今日の高等学校の体育館の二倍くらいの広さの中で製図板に向かつて整然と図面を書いていたからである。経理課長は岡崎統括班長に「よろしくたのむ」と言つて部屋を出て行く。岡崎班長は工務課全般の責任者である。自分は岡崎班長付きとなる。班長はまた今夜泊まる所が決まっているのかと聞かれたので、「まだ決まっております」と答えると、「では、今夜自分の所に来て泊まれ」と班長と一緒に官舎に行く。

夕食の膳につく岡崎夫人の心温まる手料理、そして

味噌汁の味は郷里のおふくろの味と一緒にあつたと今日までも忘れられないのである。それからいろいろと談笑し時間の経つのも忘れる。寝についたのは午後九時三十分か十時ころであつたと思う。そして今日一日の出来事は自分にとつて一生忘れることができないのである。深い眠りの世界に入つて行く、昭和十四年二月十二日である。

二、黒河省孫呉特別地区陣地構築部隊

孫呉特別地区陣地構築部隊在任期間

昭和十四年三月～昭和十四年十二月

昭和十四年三月、関東軍司令部作戦本部の出勤の命により山崎曹長以下、兵三十名帯同し孫呉特別地区陣地構築部隊に到着す。部隊長（工兵中佐）に申告す。ただちに係將校の案内にて陣地内を視察調査す。二日後より工事に着工す。

工事内容は倉庫を兵舎に改造し二段収容施設にすることである。十棟分の倉庫であつたと記憶している。倉庫はそれまでは機械器具の保管倉庫であつたと聞く。陣地内での労務者はすべて満人であつた。

満語のできる日本人通訳もいた。工事完成後それらの満人たちは秘密漏洩の恐れありとして銃殺に処したと後に聞く。

三、関東軍経理部東寧出張所（満州第三九部隊）

在任期間

昭和十四年十二月～昭和十五年十一月

関東軍経理部の命により上記部隊に転属する。当出張所に石原技師が在任していて自分に材料主任として緩芬河に赴任してくれとのことであったが、自分は富山県庁をやめて満州まで来て材料屋の業務はやりたくありませんと、きっぱりと断わる。石原技師はそれでは沿革地区で④工事を担当してやってくれとのことでは沿革の事務所に行く。そこで小松技手とも知りあつて今なお今日まで友情が続いている。

④工事は宿舎工事であつて当時の技術者は大抵尻込みをしたものである。なぜならば作業が非常に細かく難しいのである。例えば幅三〇ミリの板に横に釘五本打ちとか、二〇ミリの板の場合は釘三本打ちとかを明記してあるからである。それが一本でも少ないとか一

本でも多く打つてある、とかで問題になるからである。自分には部下三名がいて一緒になつて苦労を共にし宿舎工事を見事に工期内に完成したのである。

四月十日ころ、関東軍司令部経理部より横井技師が当部隊に着任せらる。十二月主任者以上の者に対して一席をもうけ現場責任者と懇談の意味を含み、午後六時、東寧の一流の中華飯店で会食を催し、諸工事に対する注意、工期の厳守、下請業者に対する指導等細かに筋道立てて説明をされる。最後に諸君たちは将来を背負つて立つ青年であるからダンスくらいは覚えるようにとの話をされたので、今まで皆が緊張していたところ、笑いがあちこちに飛び、和やかな雰囲気になります。中でも横井技師は話の分かる良い技師であると第一印象が非常に良かったのを覚えている。

部隊長の陸軍主計中佐松本保太郎殿は工事現場を視察に来場し「真に業を得た処置である」と賞賛の言葉をかけてくれる。それと言うのも現地は傾斜地であつたが自分のアイデアで建設したのである。東寧出張所は自分にとって思い出多き所である。

四、関東軍經理部牡丹江出張所

牡丹江出張在任期間

昭和十五年十一月～昭和十六年十一月

昭和十五年十一月、関東軍司令部經理部の命により牡丹江出張所に転属をする。この年に関東軍司令部は地上軍と航空軍の二つに分かれる。自分は航空軍所屬となる。そこで牡丹江出張所に配属させられる。牡丹江にはすでに地上軍（第三軍司令部）の庁舎が二カ年間も要して九分通り完成している。

当時、我が航空軍の司令部はハルビンの仮庁舎住まいであったので、牡丹江に庁舎を新築することを命ぜられたのである。しかも第三軍の司令部は二カ年の年月をかけて完成したのに、我が航空軍司令部庁舎を一カ年間で完成するようにと、これは至上命令であるとのこと。今西技手を主任として自分は副主任を命ぜられ現場員一同一丸となり、当時世間でいう月月火水木金金と文字通り土曜日・日曜日を返上しての工事であった。しかも現場一同の頑張りもあって昭和十六年十一月に見事庁舎が完成したのである。「成せば成る何

事も」の言葉のとおりであることを痛感する。自分の人生における尊い経験の一駒である。

五、関東軍經理部北安出張所

関東軍經理部北安出張所在任期間

昭和十六年十一月～昭和十九年五月

昭和十六年十一月、牡丹江航空軍司令部庁舎が完成し、息する暇もなく北安出張所に転属を命ぜられる。北安出張所はこの当時齊々哈爾に本部があつてその隸下に置かれていた。

自分の任務は木造の格納庫新築工事であった。全滿各地の出張所で一斉にこの木造格納庫を始めたのである。自分の現場の業者は滿州錢高組であった。工事もほぼ完成に近付いたときに非常事態が起きたのである。それは入口の扉の開閉ができなくなったのである。その原因は梁の自重荷重及び扉が吊り扉で上部に製鉄の箱金物を取り付けて開閉を操作しようとしたところに約十ミリ下がったのである。所長は大変に心配をしてくれた。何とか善後処置を取らなければと業者同様の心配をしているので、自分も監督者として所長に意見

を具申をする。まず取り敢えず梁を揚げ、扉の開閉ができるようにすることであり、それには扉中央に四寸角二本抱き合せてジャッキを使って揚げるのが先決問題であると話す。

北田技手という者がいて、「それでは駄目である。

鉄骨の柱でなければもたない」と横槍を入れる始末であった。しかし自分は業者に命じ思いどおりやらせたら梁が揚がり扉も開閉できるようになる。それは自分としては臨時の処置であり、次の処置は上部梁より丸鋼をもって扉上部の梁を一本置きに吊り上げればよい、と確信をもって作業をやらせてみたら見事に元のおりになる。

もう一つの原因は扉は吊り扉になっていて上部梁に箱金物を付け滑車をもって扉を開閉するように図面に設計してあったのである。自分は設計変更をしてそれを下部に取り付けることにしたのである。所長始め業者それに航空部隊の隊長も非常に喜んでくれた。後日この格納庫を設計した人より感謝の手紙が届く。そして自分の名が全満に知れ渡る。

設計者は日大の工学部を卒業した人であると聞く。自分は本当に面目をほどこす。自分は信念をもってやったことであり、神仏の助けであることを心から感謝する。

それからその当時の全満にいた土木技術者は南方方面に行き、ここはほとんど、がら空きとなる。自分は経理部の命により二井という所で滑走路長さ一五〇〇メートル、幅三〇メートルの工事を命ぜられる。部下一名と共に現場へ行く。下請業者は齊々哈爾池崎組である。その業者の現場責任者は滑走路に関しては非常に蘊蓄ある人物であったので、その人より教えをこうそして勉強をしたのである。

この時期に北満地区で一斉に二三カ所の所で滑走路工事に着工したのである。自分の現場には、毎日毎日関東軍司令部の参謀が飛行機に乗って来て、滑走路中央の上空より通信筒を落として行くのである。通信文にはどこそこの現場の出来高は三〇パーセントであるとか、あちらの現場の出来高は二〇パーセントであるとか、お前の所は二五パーセント出来とか、毎日が発

破を掛ける文ばかりであった。血がにじむような五月であったが、そのかいあって全満で一斉にスタートした工事を北満で二番目に完成し、しかも工期内に来たのである。それで北安主張所全員一同と請負業者一同との合同祝賀会式をやる。

一週間後齊々哈爾の本部よりの命で、牡丹江で地上、半地下、地下の格納庫工事に関する主任者会議があるので出席せよ、とのことで自分は牡丹江に行く。会議三日目の昼ごろに電話連絡で原隊に（北安）に至急帰れとのことで北安出張所に帰隊す。所長の坂本技師は、五月五日奉天停車場司令部に出頭せよとの命令であるから後々の事は心配しないようにとのことではあるが、自分としては異国の空の下に妻と年少の子供たちを残して行くのであるから心中穏やかではない。しかし、自分は妻ともよく話し合つて子供たちのことを頼み、また坂本技師にもよくお前たちのことを頼んでおいたと話し、銃後の妻として立派にやつてくれるようにと翌々日北安駅を出発する。

航空部隊長は一個小隊の兵を引き連れて見送りに来

てくれる。自分は隊長が過日格納庫の梁が下がったことを忘れていなかったと自分は思う。

そして北安出張所でのいろいろな出来事を考えているうちについ、いつの間にかウトウトとして深い眠りに入る。列車は一路奉天駅に向かって驀進す。

六、陸軍特別設定隊

陸軍特別設定隊在任期間

昭和十九年五月、昭和二十年二月

昭和十九年五月五日、奉天停車場司令部に出頭する。全満各部隊より約一〇〇〇名くらいの軍人、軍属が、いたと思う。駅前広場を埋めつくしていた。支那方面、南方方面、九州方面、四国方面、又は樺太方面、そして自分たちのように内地の浜松航空隊に行く者など、日本軍の全戦線にばらまかれた感がある。無事浜松航空隊に出頭する。それで磯田建技大尉より二〇〇万円を渡され、設定隊の備品調達のため大阪造幣局内にある陸海軍御用達の服部時計店で調達をして来るようにとの指示であった。すぐ大阪に飛び、服部時計大阪支店長に調達の件は急を要するので二、三日間で調達し

てほしい旨を申し入れる。しかしこれだけの数量では一週間くらいは掛かるとのことであつたので、「お国のためです、そこをなんとかして」とお願いをして、自分の泊まっている新大阪ホテルの電話番号を知らせて調達出来次第、電話をしてくれるようにと頼んだ。

三日目正午、知らせがきて服部時計店で備品の点検、数量などの検査し終わったのが午後五時三十分を過ぎていた。備品の内容は大略左のとおり。レベル二、トランシット二、スタッフ六、ポール二〇本、巻尺三〇メートル五、五〇メートル五、水糸二〇、旗白赤各々二〇、大工道具一式五箱などがある。服部時計店で代金を支払い、受領証を受取り浜松に帰隊し、大尉に残金と受領証及び備品調達の数量明細書を手渡し、これで自分の責任をはたす。それで人員及び編制に要するすべてが完了したので浜松より北海道の小樽市緑町直行寺というお寺に行き、そこで宿泊をする。

小樽という町は起伏の多い町であり、お寺の数もまた多い町であると感じた。そのお寺に兵が十五名くらい、また隣のお寺に兵・下士官二十名と数名の者がい

るので不思議に思ったので尋ねたところ、自分たちは千島に行く途中で、敵の潜水艦にやられて泳いで岸にたどり着き助かったとのことである。「貴殿たちもおそらく自分たちの代わりとして千島に行くと思うから十分に気をつけて行くように」と言ってくれる。

軍用船が都合できたので乗船をする。船は三、八〇〇トンであつた。機材、備品、セメント等の積込み作業も終了したので小樽港を離れる。再び小樽港に帰れることを祈る。

船の両側には駆逐艦が守り、上空には戦闘機一機が千島列島ウルップ島まで護衛をしてくれ、無事ウルップ島に上陸することができた。仲仏に感謝をする。作業は滑走路工事である。長さ一、五〇〇メートル、幅三〇メートル、磯田建技大尉より極秘図面を受け取ったとき、自分は天に向かって再び感謝をしたのである。なぜならば、それは満州の北安地区の二井の工事現場でやった同一の滑走路であつたからである。しかも一、五〇〇メートルの滑走路を他の部隊と二分し、片方が七五〇メートル、我が部隊も七五〇メートルをやれば

よいのである。そして中央地点ですり合わせをすることに決定したのである。

他方の部隊長は陸大出の大尉であり、いつも胸に天保銭を付けてこれ見よがしに威張っている青年将校である。我が部隊長は兵よりこつこつとたたき上げてきた大尉である。歳も五十二、三歳であつたと思う。自分は部隊長に工事は工期内に必ず完成しますからと、決意のほどを披瀝れきをする。一週間くらい経つた朝、徴用工が一〇〇名上陸し、他の部隊と五十名、五十名に分ける。

ウルップ島の地質はツンドラといつて地盤の上に綿のように這い繁つている。まず、その皮を取り除かなければならないのである。一方陸大出の部隊は自分たちの部隊より一週間も早く工事に着工したのである。自分はいよいよ工事に着工する前に、部隊長に徴用工の中に大工の経験者がいたらほしい、と言つたら八人の者が名乗り出てくれる。内二人の棟梁がいた。大いに心強く感じたのである。そして大工たちに集合してもらつて工事作業の内容及び計画を説明する。その様

子を部隊長にも説明する。

翌日からはツンドラの皮を剥ぎ作業を開始し、終わつて次の土砂の掘鑿工事を始める。深い所で一〇〜二〇メートル掘鑿するのである。一〇〇メートル、八〇メートル、六〇メートルと順次浅く掘鑿をして行く工程である。いよいよ路盤構成作業である。まず、碎石敷き込み転圧作業、また碎石・敷込・転圧、そして最後に砂利敷き込み均し転圧と表面を平らにすることであり、土木用語で表層工という。この作業が終わつて大工の出番である。バタ角（三寸）を五〇〇メートル間隔に七五〇メートル一直線に敷き、並べていく作業である。その大工の作業が終了した時点では、工事全体で七〇パーセント出来であると自分は確信したのである。後はコンクリートを一枘おきに打設して行けば両サイドのコンクリートが硬化していくので、型枠を取り払えば両サイドのコンクリートの高さが定規になつているのでその間をまたコンクリートを打設して行けば完了ということである。

文章でこのように記したが、実際にはいかに工事が

困難を極めたかである。セメントを除き全部の資材は現地調達である。岩をハツパで碎き残りはそれをノミで手割りをしなければならぬのである。砂も海岸から取り生水で洗い、それを運搬するのである。

水は島に二カ所しかないので大変苦労があったのである。コンクリートは四×八鉄板の上に四人で切り、砂利運搬をする者二名、砂運搬をする者二名、水運搬二名、セメント運搬二名、一班十二名、これを五班作り一斉にコンクリート打設工事に着工したのである。碎石場にはトラックを出して手積み作業であり、砂場にはやはり水洗いをしてこられた手積みである。水はドラム缶に入れて運搬する。各自、分担をきめて血の滲むようなあらゆる困難を乗り越えて、工事作業に全員全力を傾倒してくれたのである。

しかも我が部隊は工事に着工したのは、他の部隊よりも一週間も後だが完了したのは七日間も先に七五〇メートルの地点に到着したのである。部隊長の感激はまた一入であり、将兵、徴用工に至ってはただ涙、涙であり思わず全員万歳三唱す、その声全島に響き渡る。

ただし、喜びの陰には悲しい思い出があるのである。それは沖繩本島が米軍によって陥落し、ミニッツ提督の率いる米太平洋艦隊が太平洋を渡り千島列島を北上し、アラスカの米軍港に行くという情報が入ったからである。それと前後して、この島に侍従武官が来島するとのことで、事実武官がやって来たのである。そして恩賜の煙草一個、恩賜の酒一本を頂戴したのである。部隊長始めとして全部隊の将兵、徴用工は恐慄感激、最後の御奉公であると覚悟を決めたのである。

そして兵、徴用工は毎日蝸壺を掘りながらの作業を続けなければならなかったのである。その上にこの島は実に天候不順であり、朝の午前四時ころには真昼のように明るく午後四時を過ぎると暗くなり、時によっては霧が掛かれば、百メートル先がわからないのである。兵徴用工は重労働をしなければならなかったので、ばたばたと倒れて、我が部隊では十三人、他の部隊でも十五人くらいであったと記憶している。死亡した者は両部隊で五人であった。両部隊工事完成後合同慰霊祭をやり尊い犠牲者の冥福を心から祈る。ウルップ島

を離れる直前に我が部隊長は大尉より少佐に進級したのである。

その夜炊事班長自ら部隊長からだといって出来たての饅頭二十個を持って来てくれたが、こんなに自分では食べられないので自分の当番兵を呼び十個を与える。当番兵はまた変わった人物で学校は京都帝大農業工学部を卒業しているのである。ある時、自分はその当番兵になぜ将校にならないのかと聞いたところ「威張っている将校は大きらいであり兵でいる方が自分の性にあっているのであります」との答えであつた。自分は測量助手として使い、大いに役だつてくれたことを覚えてゐる。

部隊長はまた自分に対し、「君は真に工事全般に対し計画的であり、工期の厳守、部下に対する思いやりがあり、何一つ取つても君は人格者であり技師級の人物である」と高く評価してくれる。そのとき既に岐阜飛行師団司令部付の転属の命令が部隊長の手元に届いていたのである。部隊長は君の上申書及び書類が出来ているとのことであつた。帰りは機帆船に乗船し、北

海道の網走港に無事上陸したのである。

七、岐阜飛行師団經理部相模出張所

相模出張所在任期間

昭和二十年二月～昭和二十年十一月

昭和二十年二月二十日、岐阜飛行師団司令部經理部に出頭、經理部長に面接申告す。特別設定部隊長より受領した書類及び上申書を手渡す。經理部長は「君は千島で飛行場を完成して来たんだね」と労いの言葉を掛けて下さる。帰隊したら前任者と業務の引継ぎをやつてまた厚木航空隊にも出頭、部隊長にも申告するようにとの指示を受ける。夜行列車に乗り帰隊す。

翌日出張所へ出頭し、前任者と引継ぎを完了す。それより航空隊に出頭し部隊長に申告し、岐阜飛行師団より受領した書類を提出す。当出張所には男子雇員、女子雇員二名であつた。

五月初旬に厚木航空隊には菊花御紋章が無いので岐阜飛行師団司令部に申告し、師団より陸軍省に申請手続を取る。六月下旬御紋章が將校一名兵二名によって運ばれ無事到着、直ちに部隊長室に安置せられる。円

径一、〇〇〇ミリメートルで、金色の十六葉菊形御紋章である。部隊長は自分に依頼したので神奈川建設K Kに取付け方を命じる。式典の日はさだかでないが当日、三笠宮殿下の御臨席をおおぎ厳肅な除幕式を挙行す。各部隊より代表者が参列す。岐阜飛行師団より経理部長が参列す。八月一日付で陸軍技師に任官したとの経理部より電話連絡あり。

昭和二十年八月十五日正午、全員営庭に集合し、終戦の詔勅を聞く。しばらくしてあちらこちらで啜り泣く声を聞く。自分も何かしら涙がしらずしらずに出て来たことを覚えている。翌日部隊長より戦後の残務処理に部隊の黒田中尉と兵十名残すから、と言われ承知する。まず書類作成にかかる。

八月二十五日ころに突然マッカーサー司令部よりジープに乗って米軍の大尉それに通訳が来場し、部隊の機材、器具の数量等の明細書の作成、ガソリン缶の集積を命じて帰る。十日間置ききくらいに状況を視察にやってきました。

十一月中旬にすべての業務が終了したので黒田中尉

と話し、十一月三十日をもって残務整理終了とすることをジープでやって来た将校に通訳を通して話す。彼らもOKと言って帰る。

【解説】

執筆者は富山県技手から陸軍技手になり主として工務関係の勤務に従事しておられた。満州での国境陣地構築、航空軍の仕事、陸軍特別設定隊ではウルップ島（千島得撫島）での飛行場滑走路工事、岐阜飛行師団―厚木航空隊と昭和十四年二月より終戦まで自らの体験と技術をもって二十年陸軍技師となった。

陸軍には築城本部があり長は将官である。しかし、最も重要な技術的な面は技術将校ではなく文官たる技師・技手等が担当し、その工事は兵がこれに当たることもあるが、規模の大きな工事は専門の土木建築会社（大工、鳶、土工、人夫らが当たっていた。また現地人を使役したり、内地においては勤労奉仕隊（男女・老少を問わず）を動員することも多くなっていた。しか

し、その要となるのは土木工学に秀でた専門家の技師や助手であった。

陸軍には次の野戦飛行場設定司令部があった。

第一野戦飛行場設定司令部（治一五三一七）

豊橋―スラバヤ―パレンバン

第二野戦飛行場設定司令部（輝一五三一八）

豊橋―マノクワリ―バボ島

第三野戦飛行場設定司令部（威一五三一九）

マニラ―セブ島

第四野戦飛行場設定司令部（輝二四〇〇）

豊橋―ハルマヘラージャワ

第五野戦飛行場設定司令部（威二四〇一）

豊橋―マニラ―シライ―ネグロス

第六野戦飛行場設定司令部（隼二四〇二）

豊橋―漢口

第七野戦飛行場設定司令部（隼一九〇八九）

豊橋―済南―京城

野戦飛行場設定隊は次のものであるが、ほとんどが外地にある。

第十四方面軍飛行場設定隊

第四野戦飛行場設定隊、以下 第五、第六、第七、

第八、第九、第一〇、第一一、第一三、第一四、

第一五、第一六、第一七、第一八、第一九、

第二二、第二三、第二四、第二九、第一〇一、

第一〇二、第一〇三、第一〇四、第一〇五、

第一〇六、第一〇七、第一〇八、第一〇九、

第一一〇、第一一二、第一一三、第一一四、

第一一五、第一一六、第一一七、第一一八、

第一一九、第一二〇、第一二一、第一二二、

第一二三、第一二四、第一二五、第一二六、

第一二七、第一二八、第一二九、第一三三、

第一三四、第一三五、第一三六、第一三七、

第一三八、第一三九（海没）、第一四〇、第一四三、

第一四四、第一四五、第一四六、第一五三、

第一五四、第一五五、第一五六、第一五七、

第一六一、第一六四、第一六五、第一六六、

第一六七、第一七〇、第一七一、第一七五、

第一七六、第一七七、

第一特定野戦飛行場設定隊

第二、第三、第四、第五、第六、第七、第八、

第九、第一〇、第一一、第一二、第一三、第一四、

第一五

第一特設工兵隊飛行場設定隊。

第二航空軍臨時飛行場設定隊。

吉田技師が担当した得撫島の状況

海岸は一部を除きほとんど高さ二〇〜三〇メートルの断崖をなし、舟艇の達着できる地域は島の一部分に限定されていたが、兵力に比べ島そのものの面積が広く、配備も飛行場のある北東部に作戦準備の重点が置かれていた。

第四十二師団は同島に歩兵百三十連隊をおき、また

南部の蓬来野は「飛行場適地」とされ、第二大隊主力が上陸防禦および対空警戒に任じていた。その後海没した第三大隊を補充するため千島第三守備隊を連隊に

編入、歩砲混成の連隊を形成した。

その前後、吉田技師は飛行場を完成させたのである。しかし、歩兵第百三十連隊主力は二十年春、北海道に移動した。

勤労働員による飛行場建設の一例

昭和十九年三月八日、何の前ぶれもなく数名の将校が千葉県山武郡豊成村（現東金市）の役場を訪れた。将校たちは村長、助役、収入役らに地図を示し、飛行場基地建設を伝え、その協力を要求した。要請ではなく、イエスカ、ノーかを聞くものでもなく命令であったという。

短兵急な軍の要求であって、役場も火のついたように慌ただしくなり、地権者を召集し、買収に応ずる会合を開いたが、個人としては否応なしの強制買収だった。

三月十九日測量開始、五月十日地鎮祭。広い耕地の中は幾つもの大電灯がともされ、付近町村の住民が勤労働員に駆り出された。それは根こそぎ勤労働員であ

った。

建設作業員の宿舎は建ち、麦は青いうちに刈り倒され、墓地の棺や白骨が掘り出された。町家の人も駆り出され、娘も芸者もモンペ姿で作業に携わる。トラックはもとより、牛馬も動員された。

軍はすべての面で飛行場建設を優先させていた。房総半島は連合軍上陸を予想しているためと、すべてが勝つためであり、負けたら家も命もなくなる。あきらめるより仕方がなかった。地主には土地台帳の実測もされず地積によりわずかばかりの代金が支払われた。

昭和十九年後半から二十年にかけて本土防衛にすべてを投入しなければならぬとき、吉田技師は岐阜飛行師団經理部相模出張所（神奈川県）に勤務を命ぜられ、本土決戦、首都防衛航空基地、厚木航空隊へ出頭した。この一連の土地は、現在も神奈川県北部の米軍航空基地として使用されている所である。

ソ連軍越境参戦

愛知県 外山 浅一

昭和二十年八月九日、私には忘れることのできない日であります。

「ア号工事現場事務所」の一室、前夜九時ころより技術将校某氏らとウィスキー角瓶を空けて酔いつぶれ、そのまま寝込んで仕舞った。夜明けのまだ薄暗いころ、当直将校が大声で非常呼集を叫んで、ソ連軍越境参戦の入電を伝えてきたのです。

そこで早速現場関係者と協議の結果、工事を続行するかまた中止するか、軍經理部より派遣された連絡員である私が、直ちに本部に戻り指示を仰ぐことに決定したのです。

そこで「ア号工事」とはどんな規模のものであったか記憶を辿って説明してみよう。

昭和十九年、敵機B 29の本土空襲がますます激しく